山とスキー

第六十號

大正十二年七月廿七日第三種郵便物認可
大正十五年四月二十八日印刷納本

大正十五年五月一日發行（毎月一回一日發行）

札幌 山とスキーの會 發行

◇本誌は創刊號より秩父宮殿下の御愛讀を得てをります◇

第六十號目次

記事

滑走

北歐スキー通信　在ベルリン　木原　均　〔二〕

雪崩と地形圖（補遺）　大島亮吉　〔二一〕

春の藏王日記　柏木民次郎　〔二七〕

彙報抄錄

瑞典皇太子殿下の御來遊・新着圖書

寫眞版

靜寂　坂本直行

滑走

大正十五年五月發行

靜　　寂（奥手稻ニテ）　　坂本直行

滑走

頭上は輝やかな蒼空と燃えるやうな太陽。眼下や四周のすべてはたゞ白いヴアージンスノウ。
先登が絶え間なく硬い白い粉雪を切つてゆくときのスキーのゆるやかな、シュウ、シュウといふ音。
ゆるい等高線でつゞく青い條痕のひとすじの蛇蜒たるリボンのほかは、眼下も四周もみなヴアージンスノウ。
—川の走路から、峰の肩まで。
頂(いただき)は手のとゞきさうに近い。一歩ごとに、峰々のうへにまた峯があらはれて、遠い青色に消えこんでゆく雪花石膏のやうな峰々の新しい饗宴。
頂。風もない日、憩ひのひと時とすべてのものを癒す日光のなかでの休養。
下降の準備。ビンディングをとゝのへる。スキーをはいて、ルツクザツクを肩に。列をつくるために一寸と止まつて三人は滑りだした。Adiunt in spatia. はじめはやさしい。直滑降。それから凹み。その狭い谷のあひだは「ポート タック」で滑降する。
片つぽの足の靴に對して片つぽの足のスキーの先端。すると、光榮の渦巻のなかで廻る—またわづかばかりの制動で左に回轉する。—一秒一秒に歸路にある鳩のやうにまつすぐに。
無數の結晶粒に對して、ほんとの森の音樂。—ふたつの牧場小屋のあひだ、沈んだ路を注意して、森林帶に下る—かゞり所を通る羊毛のやうに、粗林のあひだを糸が出たり、入つたり。どんなスリークオーターでもこんなに走ることが出來ようか。こつちへ曲り、あつちへ鋭く回轉し、それらの低い樹の枝の下をヒヨイとくゞり、そこの氷を確實に。
牧場をこえ、その門を通る。(それが開いてゐたことを神に感謝する。) アルプがだんだんはやく、よりはやく沈んでゆく。そこでやれ、この角を下れ。先のスキーを開いて、後のに体重を。雪を辷りのける。まはる!
神のよき地で、これにどんなものが較べられようか?

—ジイ・エー・セリグマン—

1

北歐スキー通信

在ベルリン　木原　均

第二信追記

（瑞典・フインランドのオリンピアーデ出場問題）

小生は今 Mora より Oslo に向ふ汽車中此を認めて居ります。Mora から Ramshytten まで F. I. S. の President Holmquist 氏と同車して色々の話を聞きました。（今は Rava 氏と二人）一九二八年のウインターオリンピアーデに瑞典が選手を送らないと云ふ事は誤聞です。經濟問題だから何人送られるか分らないが送らないとは定めない。又諸威だつて送らないと明言したが、之も送るやうになるだらうとの話、從つて芬蘭も參加するでせう。（三國の提携はないと思ひます。）

車内でした質問中「Staffel lauf リレーレースは何故オリンピアーデその他で多く行はないのか」に對して充分な解答を得ました。

之は Chamonix でもその外の Kongress にも議論したのだ相ですが、一番困る事は費用と時間の問題だと云ひます。費用としては各國が多數の選手を派遣する事が主で、それから賞品とか準備が要る。又時間から云つても此の爲めに一同は大會の期間が延び從つて費用が嵩む譯でせう。

之で國際若しくはそれに近い大會にスキーリレーレースのない理由はお解りと思ふ。但し地方的には Sweden にも大きいのがある由。一人が四十キロから走るのが來週此瑞典にあつてその爲めに Holmquist 氏は出張すると話して居りました

Sisfellanf はその外 Propaganda 用に町中で競走したりする相で、そのためには一番いゝとの事です。（陸上リレーレースでも伯林あたりのは之に類して居ると考へられます。）

それから Schweiz の競技場の事ですが、之は多分 schweiz が決定權を持つ事になるでせう。Davos, St. Moriz がよからうとは Rava, Holmquist 兩氏が一致した所です。「日本は選手を送るか？」と聞くので「多分」と答へて置きました。而して吾々はまだ競技は出來まいが見學の目的で誰か來ると云つて置きました。長距離には芬蘭、ジャムブ、Kombiniertes Rennen には諸威が控へて居るので最初から大きいふれこみは大禁物。

北歐第三信

（ヴサ競走）

ストックホルムを二月十九日に出發して、生物學者リネーを出した瑞典の舊主都Uppsalaに下車、急がしく自動車で Dom (Linne のお墓と Gustaf Vasa のお墓がある)を見、植物園に一寸寄つて Prof. Juel に敬意を表し、歸へり道に Linne の家を見て、また汽車にのり、Rättvik に着いた。極めて小さい町で Siljan と云ふ湖水に面して夏は此の湖水に遊ぶ人が多いのであらう。Hotel Siljandorg に部屋を Nordenson 氏の厚意であけて置いて貰つたので一番混む時季ではあつたが泊る事が出來た。Stockholm では勿論 Finnland でも Schweden の方々にお世話になつた事は一通りではない。日本語でかいても之等の諸氏にはお分りならないと思ふが、心からの御禮を申し上げる。President の Holmquist 氏、舊の Sekretär Nordenson 氏、新らしい Sekretär の Hamilton 氏、體育協會の Waerland 氏その他スキー聯盟の方々。

Rättvik では二日を樂しくすごした。今までは日夜見物とか會合で少しもスキーをはく機會がなかつたけれど此所では二十日の一日をスツカリはきつゞけた。

瑞典の人たち（Stockholm から來た人が多い）がどう云ふ風にスキーを樂しみに片田舍まで來て居るかを知る好機會であつた。勿論二日だけであるからこゝの片鱗を見たにすぎない。

十九日の夜五時半にHotelについて、一日早く來て居る伊太利のRava氏と會ひ、その晩は少し離れた所に馬橇にのつてお茶を飲みに行くと云ふので同行する。零下十餘度の寒さだが大部分の人達は出かけた。十數臺の橇に分乘して各々の橇にタンネのタイ松をアカアカと燃やして夜道を疾走しつゝ町をつきぬけて目的の田舍家に入つた。用意のコーヒー、お菓子を立つて飲み食ふ、さうして身體があたゝまつた頃また馬橇でかへる。僕はRava氏と伊太利婦人二人と同乘、四人共通の毛皮のカバーを膝の上にかけては居るが、かへり道は寒かつた。月がさへて青白いタンネの林をタイ松をかざし乍ら右に左に上に下にゆられゆられて町に戻つた。大聲を發する人もなく時々樂しげな話が聞へるだけだつた。

翌日は遠足に加はらないかと誘はれて之について行く事にした。同行者七名（男三、伊、瑞典、日、女四、伊二、瑞典二）午前十時出發。林を通つたり道の上を辷つたりして休まずに行く。僕のスキーは芬蘭製の新らしいので、あと辷りして弱つた。女の足の強いにも驚ろく。いつも僕は遅れてついて行つた。行先きが何と云ふ所か何にも分らないで後をついて行く。途中噴水のある所で少し休んで、あとは殆んど休まず午後一時半頃まで上り通しに上つて、ある田舍家に落つく。此の家は此の邊の舊家で有名な家だ相だ。此の土地（The Heart of sweden である Dalekarlien）に五百年此の方住んで居ると云ふFamilieである。先き廻りしてお辨當が運ばれてあり、婦人達は毛皮の外套まで持つて來させてある。空腹はとても之計りでは醫せなかつたが適當に喰べて家の中の道具を見せて貰つて歸途についた。今度はすべるスキーの僕が一番樂でユックリし乍らも誰よりも早く辷つて下れた。平地に來てから馬に牽かれてHotelまでかへつたのが午後五時。

新らしい靴で足を少し痛めたが別にマメは出來ない。Rava氏は今度はMoraに行くと云ふので同行者一同同じ食卓で食事をする。土曜日だからか男子は皆スモーキングを着て居るし、女も着かざつて居る。前には皆スキー服で居たのに。Swedenはブンシュの國、どこでも飲まされる。甘いから僕のやうな者にも左程苦にならない。然しあるロシア人が「ブンシュのつき合ひはよせ」と云つた。翌日は差支へると云つて、この男は強いから飲みあきたに違ひない。それに餘裕のある國だから服裝がいつもやかましいらしい。その外は樂園である。旅行中盜難の恐れはなし、吊錢をご魔化したりせず氣持ちがいゝ。

Rättvik で久し振りでスキーをはいて滿足した。翌二十一日午前十時半に特別列車が Vasaloppet のために出るので之にのつて一時間して Mora につく。

停車場に Holmquist 氏 Rava 氏その他 Vasalauf の委員も居て、徽章を胸にさして貰ひゴールの前の席を與へられる。

競走の結果を書く事に Vasaloppet (Vasaskilauf) が如何なるものか、知らない人のためにあらましを書く。

千五百二十一年に Gustav adolf の指揮の下に丁抹に對する獨立戰爭が起された。その時 Mora がその發端をなした土地であつた。それを記念するために Vasa の銅像が Mora に立てゝある。又この新らしい Schweden の歴史上のエポックを別の方法で記念し初めた。それが Vasaloppet である。

それは Gustaf vasa が丁抹に反抗して戰爭を起す第一の試みとしてグレカリア人を味方にしやうとして志を得ず、諸威の國境にスキーをもつて落ちのびて行つた。そこで Dalekarlien (又は Dalarna) 人も大いに後悔して、スキーに熟達した二青年をして後を追はせ遂に國境に近い Sälen で追付き、若い王樣を呼び戻した。と云ふ古事が此のスキー競走の源をなして居る。

第一回の Vasaloppet は一九二二年に行はれ今度が第五回である。競走路は Sälen が高い位置にあるのと Stockholm から不便であるためであらう。實際昔に走つたコースを反對にしてある。即ち Mora がゴールで全距離九二キロメートル。

從來のレコードを摘んで見ると次の通り

姓名	所要時間
1922年	
1. E. Alm	7. 32. 49 (時 分 秒)
2. O. Lindberg	7. 38. 01
3. A. Israelsson	7. 38. 29
4. T. Fjällberg	7. 40. 32

5

5.	P. E. Hedlund	7. 40. 38

1 9 2 3 年

1.	O. Lindberg	6. 32. 41
2.	A. Persson	6. 33. 30
3.	G. Stängberg	6. 34. 36
4.	A. Israelsson	6. 41. 39
5.	A. Stenberg	6. 42. 08

1 9 2 4 年

1.	J. Lindgren	6. 53. 26
2.	A. Stenberg	6. 55. 14
3.	A. Stolz	6. 57. 09
4.	P. E. Hedlund	6. 57. 14
5.	S. Utterström	6. 59. 00

参加者は年々増加して居る。1925年は150名出場の由。

1 9 2 5 年

1.	S. Utterström	6. 03. 55
2.	J. Lindgren	6. 10. 39
3.	A. Stolz	6. 10. 43
4.	P. E. Hedlund	6. 11. 35
5.	E. Alm	6. 12. 50

以上で分るやうに同じ人が何回も出て居る Hedlund の如きは五等までに三回も這入つて居る。

Start は同時、昨年は正七時出發、今年は七時半に出發。三センチ程の新雪で温度は零下四度、晴天無風、コンディションとしては申分ない日である。參加者は百〇四名。

コントロルスタシオンからランナー通過の順番が通知され、その成行如何にと群集は掲示場に蝟集して居る(Stotkholm では Radio で聞けるやうにしてある。

午後十二時半頃瑞典皇太子殿下と妃殿下がゴールのそばの席にお付きになり、樂隊が勇ましい音樂を奏し初めると場内が刻々緊張して來た。この選手の到着をまつ間に殿下から親しく日本御來訪の事を伺つたのである。(彙報抄錄欄)

一時少しすぎると選手が見へたと云ふ。ヘーヤー、ヘーヤーを浴びせかけられ乍ら十九番の Hedlund が先づ第一着となる。この時は皇太子殿下自ら出て Hedlund とかたい握手をされ、それから勝者に胴上げを三回してお祝ひする。(之は第一者だけ)次ぎが昨年の勝者 Utterström。今年の成績は次ぎの通り。

1. P. E. Hedlund　5. 36. 07
2. S. Utterström　5. 38. 51
3. J. Lindgren　5. 41. 13
4. T. Vikström　5. 43. 44
5. A. Stolz　5. 47. 38
6. K. Pettersson　5. 48. 45
7. O. Hansson　5. 50. 28
8. G. Johnsson　5. 52. 39
9. F. Isaksson　5. 56. 23
10. T. Granbom　5. 56. 37

11. O. Lindberg　5. 5.7 22
12. A. Alm　5. 59. 03
13. G. Karlsson　5. 59. 24
14. S. Nilsson　5. 59. 56

參考のため以下は二つの記錄を掲げる。

20. G. Åström　11. 04
88. A. Skogberg　6. 03. 43

一番から二十番までは昨年のレコードより上である。さうして一番から五番までは全部北瑞典の人達で占めて居る。冬季の長短が之にはかなり關係して居ると見てよからう。

この競走にはクラブの Best three の時間を加へてそれによつて Klub に賞を與へて居るし又個人では一等が十點二等が九點、十等が一點とし毎年の點が加はつて三十點となると賞が得られる。

Hedlund は 6+4+7+7+10=34 となつた。

全距離を走つたものには夫々記念品を與へてから全部の到着まではかなり長い時間がかゝる。その他色々の賞がある。

午後四時から Mora 教會で紀念祭が催され此の式には Kronprinz, Kronj prinzessin も御列席、短時間の嚴肅な式である。Frihetssang (Freiheitsgesang) とか Hymn ur "Gustaf Vasa,, と云ふやうなものが Dalarna 風俗の婦人と男子によつて合唱された。

午後六時に Vasa の銅像のある廣場——決勝點——で賞品授與があり Kronprinz 自身の演說があつて後、入りかはり立かはり賞品をうけ取る。

Bravo! Hedlund!

Hedlund は持ちきれない程の賞品をかゝへて群集をかきわけて出て來た。澤山の賞品なので七時頃までかゝつた。

参考のためにHedlundの年齢を聞いて見たら廿八才、矢張り前通信にかいた二十六乃至廿八がMaximumである事は確かかも知れない。之は人種によつて多少の相違はあらう。

其の晩は宴會があつて、プンシュを三杯程呑んでスッカリ醉つた。翌日の出發が早いので少し早く席を立つた。翌日（二月二十二日）午前七時四十分Moraを立つて（途中までHolmquist氏と同車）オスロに着いたのが午後十時四十五分。稅關も簡單、スキーなんかわけなく國境が通れる。

遂にスキーのメッカに來たのだ。新聞を見るとThullin Thams外二名が七〇・五米突飛んだと報告して居る。然しThamsはまた轉んで賞には這入つてないらしい。Holmenkollenでの Thamsはどうだらうか、今度ジャムプだけはない。Kombiniertes RennenとDaüerlaufがProgrammにのつて居る。Haugは今まで六年間連勝したと聞いたが第七年目は、„Skikongen Haug" はどんな活躍を見せるか。明廿四日は50kiloだ。FinlandのRaivioその他がNorwayの猛者と決勝する事になる。その結果は明日に。因に廿七日がKomb. RennenのDistance Race. 廿八日がKomb. RennenのJump. sprung alleinをぬいた事が諾威スキー界の趨勢なのであらうか。（オスロ二月十三日）

北歐第四信

（ホルメンコレン競技會第一日）

Holmenkollen第一日の50kiloは終つた。その結果は諾威の勝利となつた。芬蘭のRaivio, Nikŭ, Lappalainenの猛者も諾威では遂にKjelboth, Heggeには及ばなかつた。

小生はRava氏と午前十時少しすぎにコースに着いた。その頃の温度は氷點下七度、もう九番のRaivioは通つた後で、Thamsが50Kiloを走るのに丁度會つた。コースについて多數の人達がぞろぞろと行くので、吾々も後を追つて十二時頃まで進み再びかへり道のコースを傳はつてZielに來た。

此の大會を開催するForeningen til ski-Idraetens FremmeのVice Precident Kaptain OestgaardからPrecident Major Finn,

Ovaleに紹介され、その外に F.I.S. に屬する Norwegischer Skiverband の precident Dr. Lindboe にも此處であふ事が出來た。(前者はスキーの宣傳を多く行つて後者は F.I.S. に加入して國際のスキー競技に參加する、Sweden でも此の二者があると云ふ、一種の分業であらう。) Rava 氏と小生にマークを與へて自由に競技場に出入する事を許した厚意には兩人で大いに感謝した。

コースはタンネの林をぬけて平地あり、坂道あり、右山或は左山で走り小さい變化多く相當の登りもある。(この略圖がありましたが御都合ではぶきました。)(一周五〇キロ)此の登りには Finnland の選手は餘程苦心したと聞いた。平地に慣れた彼等としては止むを得ない事であらう。山地には寧ろ Niku が強く(Finnland では割合に良くなかつた)彼れが此の日彼等の中では一番の成績である。

	時	分	秒
1. Olav Kjelboth	3.	45.	19
2. Ole Hegge	3.	46.	10
3. Ole Stenen	3.	48.	27
4. Johan Stoea	3.	50.	15
5. Tapani Niku	3.	50.	25
6. Tauno Lappalainen	3.	50.	48
7. Ole Langholen	3.	50.	52

此の前にも Norwegen の選手はヒツコリー材のスキーをはき Bergendahl の Bindung を使つて居ると書いたが此の日も大部分の選手はそであつた Thorleif Haug Bindung の人も見かけた。Finnland では樺材が適し、Norwegen では Hichory が適すると之の結果から速斷は出來まいが樺材は比較的高温の時には辷りが悪いやうであるから或は登りに弱い事の外にスキー材とか外にワックスの塗り方等その他にも關係があるかも知れない。之は芬蘭の監督パルムロース氏に質して見やう

決勝點には第一に九番の Raivio がつき、その時間が3時間51分秒と記されると觀衆には非常に憂慮の色が見へた。暫

くしてKjelbothが前記の好記錄でかへつて來たので、彼等は歡喜して居る。それからNikuがゴールについてもその記錄はKjelbothに到底及ばない。かうなつては芬蘭の望みは155米（殿りのランナー）のLappalainenにのみかゝつた。此の時はLappalainenの到着だけが諸國人の心配の種であつた。アナウンサーが百……と云ふミギョットする位に皆緊張して居た。Startの時間が印刷されてあるので、用意のいゝ人は時間を測つて居る。アト五分の中にLappalainenが來なければ!! アト二分……! 遂にLappalainenは來なかつた。「祖國は救はれた」とOestgaard氏の一言。所が同氏の夫人は芬蘭人なのでのFinnlandの方に肩をもつて居ると聞いた。

Dauerlaufの覇を唱へるには芬蘭はまだ足りないとは云へ矢張り強い、瑞典、獨乙の選手も居たが問題とならないで終つた。

今度のProgrammからであらう。年令が印刷されてある、職業のないのは殘念だがそれは種々雜多だからそれはいいとして一部別送するから參考にあてるやうに望みます。

選手はあとで醫者の診斷をSkimuseumの一室でうけ、呼吸、脈、目等その他を測つて居る。湯の設備も半地下室にあり、又塗蠟室、脫衣室（棚の上に番號でのせ兵士が此の日は監視して居る）その他がある。

Museumは第一階にスキーが陳列され、東はシベリア地方のスキー（カラフトのスキーと同じ）から西のはてまで古い年代から陳列してある。第二階にもNansenの1893年にGreenlandで使つたもの、及びAmundsenの北極探險に持つて行つた諸用道具等參考になるものが多い。その外第二階には事務室と寢室（特にコースの印シルシをつけに行く人のために一部屋があるのは必要な事だと思つた）と食堂、吾々はこゝでOestgaard氏の夫妻と坊ちやん（六歳位、1.5メートル飛べる相である）とでお茶とサンドウイッチの御馳走になつた。

かへり道は遠藤先生から豫て聞いた事のあるスキー道を下つた。砥のやうな道で適當の傾斜にするため曲つて居て、平地まで辷つて來ればもうオスロの町の近くだ。途中婦人連に何度か追ぬかれた。坂の模樣を知つてるので躊躇なくスルスルと行く。此の國にスキーの名著（又は大著）なきは當然であり、不必要なのではあるまいか。 ―二月二四日オスロ―

第四信の證正

――二七日、オスロ　木原生――

Holmenkollen のプログラム中 Sprung(allein)が今年だけない樣に書いたのは誤り（この事は廣田兄の山とスキーに書いた一文でも分りますが）32 以上と 18, 19 の Jumper には矢張りあります。と云ふわけで例年通りのプログラムですが 20—32j の人達の Sprung(allein)がないのは一寸不思議です。之は時間がないのだと說明してくれました。Tulin Thams の樣に Runner としては左程でもなく Sprung にかけては天下一品の男に外の練習を强ふる（即ち長距離）事は可愛相です。然し兩方とも相當以上に達する人を Skiking とするなら Haug 式のをとらねばなりますまい。

（今日は雨ふり、ホルメンコルンも臺なし。）

北歐第五信

（ホルメンコレン競技會）

今日でホルメンコルンの大競技會も終りました。私の北歐の旅行も之でお仕舞ひです。ホルメンコルンは矢張り今までの大會中の白眉です。出場者の多い事驚嘆の外ありません。ジャムブの今日なぞは二百五十名（豫選あり）許りの選手が午後の一時から五時迄間斷なく飛びました。

新人の輩出、その登龍門であるホルメンコルンに數万の觀衆の瞳を一身にあつめて空を行く若者の晴れの日、それにも適はしく晴天無風、諸威男兒の理想人物として子供達がタムスを崇めるのも故ある哉。

「子供達の理想はタムスです」とはオストゴールト氏夫人の直話、多分坊ちやんはタムスになる氣なのであらう。寒いのに初めから終りまでプログラムを見合せて飛躍ぶりを見つめ、あとで形を眞似て居る。

扨て拙い乍らホルメンコルンの結末まで筆を走らせる。

Fluse ではあたゝかい上に強い風に吹かれて寢てすごしたと云つていゝ位であつた。Station の位置が Baedeker に依ると 1222m. で Finsenût は 1670m. とあるから登つたとしても大きなものではなく、今後ワザワザ行かうとする人にはその必要はないと御忠告申上げる。ホテルは一軒(Hotel Fluse)あつて三月には滿員の由、吾々二月廿五、六日の兩日に泊つたがお客はたつた十四人。序だからかくけれど部屋代は六クローネ(三度の食事が朝2.5 晝3.5 晩4.5 で、此の方が高い)毎日の Programm を作つてお客樣の案内をしたり又は案内者を雇つて吳れたりする人が居て面倒は見て吳れる。風の強い廿六日には帆を貸して吳れてそれで少し許り遊んだ。近くに辷る斜面はあるけれど多くは一ケ所にとゞまつて遊ぶ事をしないで、大廻り小廻りと云つた樣に道標について散策をする。屋内 Skating 場もあつてスケートもやれるやう出來て居る。僕の行つた時、丁抹から新婚の夫婦が來て居て一緒に辷つた。此の連中とはオスロ行きの汽車中でズツト同室で面白かつた。

Rava 氏の想像がよく當るのでおかしい。「此の兩人は新婚で Norway 人ぢやない」それを確める爲めに「新婚でせう?」とやつたもんだ。「さうです」まではいゝが仲のいゝ所を散々に見せられた。

ホルメンコルン第二日

二月廿七日は雨降りだと云ふのでスキーを持たずに Frognersaeteren の Start に複合競技の 17kilo を見に出かけた。こんな日にも皆スキーをもつて來てゐるんで悲觀した。隨分熱心に見てる。今度のコースは Clockwise に廻つて前のと少し許り違ふ。標高の差が前のより少ないと云ふ事を聞いた。コースを札幌邊と比較すれば手稻山の針葉樹位のタンネの林であんなに高くない所と思へばいゝ。餘り樹のこんだ所は通らせない。町では雨だつたが競技場では雪、しめつた雪だ。Oesthye の適當なのを塗つたと見へて登りなんぞかなり急いで走つて登つて行く。

此の日の Groettumsbraaten の成績は拔群で此の結果からしても Hagg は「皇帝カップ」をとれないだらうと想像された。此の Groettumsbraaten は 50kilo でも半分位まで非常にいゝ成績で走つたがあとで棄權した位の寧ろ短かい距離が得意で

ある。又此の選手は Stockholm の複合競技の 15 kilo で決勝點について胃けいれんらしく非常に苦しんだが、此のホルメンコルンデーにも烈しくはないが矢張り同じ事をやつて居た。決勝點につくと又苦んで助けられて居る。Stockholm ではそれがたゝつたのだらう優勝はしなかつた。

此の競技には 50kilo で大いに名を上げた Kjelboth, Steneh, Hegge 等皆出場。Haug だけが名の知れてるのでは 50kilo に出ないで之にのみ出場した。

KL. I

		時	分	秒
I	Johan Groettumsbraaten	1.	09.	54
II	Olav Kjelboth	1.	14.	17
III	Hagb Haakonsen	1.	14.	19
IV	Magnús Saethre	1.	16.	06
V	Halvor Orebakken	1.	16.	41
VI	Thorleif Haug	1.	17.	35
VII	Arthur Holgli	1.	17.	41
VIII	Iohan Stoea	1.	17.	48
IX	Reidar Oedegaad	1.	17.	53
X	Sigurd Naestad	1.	18.	19
XI	Ole Hegge	1.	18.	54
XIV	Einar Landvik	1.	19.	14

KL. II

		時	分	秒
I	Kai Rusten	1.	11.	25
II	Halvor Orebakke	1.	16.	13
III	Brynjulf Skotnes	1.	17.	19
IV	Ove Bakken	1.	17.	43
V	Didrik Lian	1.	17.	56
VI	Nenz Loevhaugen	1.	18.	07
VII	J. Kielland-Lund	1.	18.	27
VIII	Joh. Myhrberg	1.	18.	47
IX	Gjerm. Marcussen	1.	19.	12
X	Olav Myhrmel	1.	19.	16
XIII	Jacb Jacobsen	1.	19.	45

30 秒置きの Start で第十一番の Hegge が一番に goal にかへり、遅れてぬかれた連中がボツボツ到着して居る中に早くも 58 番の Haakonsen, 70番の Haug 78 の Kjelboth がかへり、次ぎに意外にも 98 番の Groettumsbraaten がついた。之には皆驚嘆した。Finnland の Nykänen はよい成績ではなかつた。

Klasse I に次いで Kl. II の人達がどしどし Start を切る。Goal についてる人があるのに一方は之から Start する人がある。Programm にのつてる人員が I II 合せて 338.

此日には Joung and Old boys の Jumping の豫選が左程遠くない Boxkollen の Schanze であると云ふので大急ぎしてその方にかけつける。十一時から初まつて居たので Old boys は終りで、Joung boys が飛んで居た。元氣一杯、それも三度んでょい二つの點を平均してそれで明日の出場資格を決定すると云ふので、とても勢がある。三十米突位が餘計とんだ部に屬する小さい Schanze であつた。Programm には 139 人があり本競技に出た數は 34 人であるから隨分ふるい落したものである。

（註。外國からの選手には制限がない、國内の規定で適當と思はれるだけ國内選手を選抜するのである。外國選手は練習に飛ぶけれど決して採點はしない。）

此前の通信に記した事だけれど三度飛んで點數のよい二度（Zwei beste Sprunge）の平均をとる事は本競技にはない。國際規定にもある通り、凡ての Sprung は採點される。而して少なくも二回は飛ばせる事になつて居る。Holmenkollen のやうに Programm に 549 名も jumper がのつてる場合に三度程飛ばせる事は不可能に近いと思はねばなるまい。此の 549 名の中二百五十名は本競技に參加して居る。

豫選の jump を一時間許り見て Oslo にかへり、Skate の大會を Stadion で見たけれど、氷面に水が三—四センチもたまつたりしてるので Wasserlauf の感があつた。廣告には Otto Polacsek, Sonja Henie, Arue Lie の如き人達の名が出てるのでつられて行つたが、明日曜日の午後に主な競技 Figure skating があるとかで失望して場を出た。

二月廿八日　Italy から北歐に Sonne を持つて歩いてると稱する Rava 氏の豫言（と云ふよりははかない望み）がかなつて晴天無風、あたゝかいのも見物人には差支へない。（雪の Condition はザラメの樣になつてるので十二度の今日だとて jump には大きい障害を與へたとは思へなかつた。たゞ仆れた時スキーがさゝつて非道い目にあつた人を見たけれど怪

我した人は選手にはない。Start の位置を決めるために、選手以外の人が數人飛んだ時、吾々が前夜一緒に食事した Ljung mann と云ふ Jumper が肩を少し痛めたゞけである。)

午後一時に初まると云ふのだけれど電車が混むといけないと云ふのと、少し Holmenkollen 附近の散歩をしやうと云ふので午前九時から出かけてタンネの森をスキーで滑走して一時廿五分許り前に競技場についた。道は知らないが多勢の行く所が schanze のある所だ。さう話し乍らカラリとした所に出ると schanze が見える。之こそ名前だけ聞いて居た Holmenkollbakken なのである。

東面(少し南によつて居る)した斜面なので午後の日が Sprung bahn に一杯あたつて雪はスツカリ濕つて居た。第一回の Probesprung の Ljüngmann 氏が飛んだ時吾々は着いた。前に仆れる。次ぎが即時……。

Start の位置は中段(と云つても頂上と大差なし)と定まつた。場内は刻々に群衆に埋められ、その數は五万餘と云ふ話であつた。即ち Italy の Some は少なくも五万 Krone の價値があつたのである。

定刻に諸威の皇帝が臨御、Kongentribune に着かせられると同時に No. 1 jumper が飛び 26 米突と發表される。續けて矢繼ぎ早やに 2.3……と飛ぶ。時々斜面係り長が笛で合圖して斜面を直す時の外シキリなく飛ぶ。Schanze 左側(上から見て)に旗で starter に「飛んでよし」の Sign をすると jumper が Start を初める。同時に Schanze の右側に控えて居る。兵士がラツパで Start の切られた事を知らせる。(Jumper の番號は回轉式の記點盤が Schanze の左上にあつて之で知らせ、飛躍距離も Aufsprungbahn の中頃にある回轉盤でその都度公表される。四十メートル以上の報告には大きい歡聲がをこる。)

No. 29 (Tallin Thams) の回轉盤が廻ると場内はシンとしてカタヅを呑んだ……。彼れはそれほど Holmenkollen の寵兒である。大きく二回手をまはしてから、一すゝめてまた一回振つて安定に降りた。39.5 米突(第二回目は四三、五米突)次ぎ次ぎに飛んで複合競技の Kl. I に屬する人がスツカリすむと次ぎが Kl. II. Oldboys (32以上) Joung boys (18才と19才即18から20まで少年組)が飛ぶ。Oldboys の中には Haug の前に Skikong の名を馳せ今では Bindung で名の知れてる

Bergendahl が居る。之も非常な人氣だ。少年組には Stockholm. で第一等の Erling Amundsen とオスロの北 184 km はなれた Lillehammer に近い Fluberg（フルーベリー）の新設 Oddnaess Schanze で、70.5 米突とんだ Sigmund Rüüd が居る。Amundsen は少し屈身の姿勢をとるが Rüüd は身體を眞直にのばして大膽に前方にかけて飛ぶ。そのあざやかさは今でも目に浮ぶ "Achtung!" "Amundsen!" "Achtung! Rüüd!" と注意しあつて、此の兩人の飛ぶ時は見た。此の前にもかいた事だけれど、着陸より少し前にスキーの滑走面が審判臺の下あたりからでも全部見へる位までに、身体を前がかりにし、その時に一段と前方に推進して進むかの感を與へる美しい力のこもつた jump であつた。

第二回目の jump も引つゞいて行はれ、五時までかゝつて大團圓、三人の役員が Triplejump をやつて Schanze は鐵鎖で閉ざされた。

この日の成績（Komb. R. では 17 kilo との平均に依つて順位）を記すと次ぎの通り。（Komb. R. の審判の採點は未だ發表されず等級のみを記す。）

複合競技（Kl. I.）（數字は jump の distance）

Kongepokalen	Johan Groettumsbraaten	
1. Hagbart Haakonsen	(31.5	36.5)
2. Thorleif Haug	(30.5	36.0)
3. Einar Landvik	(36.5	39.0)
4. Ole Stenen	(34.0	39.0)
5. Sverre Kristiansen	(36.5	40.0)
6. Sigurd Nästad	(30.5	39.5)
7. Ragnvald Landvik	(36.5	39.5)

（以下 28 番まで）

Thams は Komb. Rennen では廿八番迄にも這入らない 17 Kilo の點が餘りに悪いからである。此の Komb. Rennen の外

に20—32歳の jumping competition がない事を不當とする人が少しはある。「15Kilo を Jumper に走れと云ふのは無理だ」と氣焔を前夜あげたのが負傷をした Ljungmann 氏、同氏は Norwegen 出身、中央 Europa で Jumper として知られた人である。Thams は最長不倒距離を Kaasa (38.5 44.0) にゆづつたが、最高點の故で第三回目の Damenpokal とホルメンコルン金メダルとを得た。

Sats の時に手を後に振る人が多い Kaasa も後に引く一人である。

Komb. Rennen の Kl II. では

1. Bryjulv Skotnes	(30.5		36.0)
2. Kristian Holmen	(33.5		36.0)
3. Kai Risten	(faldtefiergodthop		38.0)
4. Konrad Braathen	(32.5		37.0)
5. Hans Hovde	(32.5		39.0)

以下三十一番まで賞あり。(Rusten は Jump は一回仆れたるも長距離に成績よく、第三位にとゞまる。若し Jump に仆れざりしならば當然第一位ならん。)

年長組のジャムプ成績は次ぎの通り。(½が點數)

		Distance	Points
1. Carl Haave	40.0	41.5	149.5
2. Johan Kristoffersen	39.5	41.0	146.0
3. Per Kihle	38.5	39.0	144.5
4. Laüritz Bergendahl	36.5	39.5	142.0
5. Bertrun Tohansen	36.5	38.5	141.0

(以下 12 番まで)

少年組は　　Distance Points (½)　(二回を二人の審判が採點したる點の總和であるから½)

1. Sigmund Rudd　40.0　43.0　150.5
1. Erling Amundsen　42.5　40.5　150.5
3. Hans Bergersen　38.5　41.4　143.5
4. Ivar Dahl　39.0　40.0　141.5
5. Albert Nordstad　37.0　40.0　139.0

（以下 13 番迄）

終りの頃は Auslauf をとりかこんで居る觀衆の立つて居る氷面（此の所は小さい湖であるらしい）が缺下して水がかな出りて來た。假りに二百人が二回宛とぶとしても四百回の Jump を見るわけであるが熱心にあかずに見續けて居る。さうして大膽な Jump の度毎に歡聲がをこる。

終つてからかへりの電車がさぞ混むだらうと思つたら思つた程でもなく二臺目のにのつてかへれた。之は多くはスキーで下るか又は歩いて Oslo まで行く人とあり、外に馬橇なぞの便もあるからであらう。

午後九時半 Cirkus で賞品授與式があつた。之には 1 kr を拂つて入場出來るのであるが老幼男女で滿員、一人一人を呼び出して渡すのであるから時間が隨分かゝる。十一時四十分までかゝつたが一人として退場せずに拍手を續けて居るには驚いた。それでも人氣の多い者と少い者では大變違ふ。

賞品は 50kilo から初まり Konbiniertes Rennen, Sprung に終る。

50kilo の Kjelbotn が第一に呼ばれ Finnland の猛者連となると大變な騒ぎ。次ぎには Komb. Rennen, の Groettumsbraaten が皇帝カップをうけ、次ぎが Haakonsen. 續いて "Thorlif Haug" と Sekretär がよみ上げた時に Haug を呼ぶ聲が場内の諸所から起つたが遂に Skikongen Haug の姿を見出す事は出來なかつた。

Haug には第二位は不充分なのか？

かう考へて見た。Haug は此頃忙しい仕事(忘れたが器械製造?)のため練習が出來なかつたとそれは氏がKongenpokaleを得る事の出來なかつたのは當然であらう。

Tullin Thams は Kombiniertes Rennen には順位が下で賞に這入らなかつたが Jump の成績によつて與へる Damenpokal をうけ更に三年の優秀な成績のために Holmenkollen メダルをうけた。此の時の場内の歡呼は諸兄の想像にまつ。

年長組では昔の Skikongen Bergendahl が大變な人氣だ。

"Bindung!"

大聲ではないがとなりの Italy 氏の賞讃の聲、三十八の Bergendahl が子供として第四位の賞をうけた。Haug が單に(何かの支障で缺席したのではあらうが)居なかつた事を Bergendahl の無邪氣な態度と比べて甚だ遺憾に思つたのは僕ばかりではあるまい。(Langlaüf にノルウェー選手は全部 Bergendahl Bindug, Haug でさへ之を使つてる)

次ぎの大きい歡呼の渦は年少組の Rüüd と Amündsen の呼ばれた時である。Rüüd は小柄で五尺三寸位本當に子供としか思へないニコ〳〵した可愛い少年である。Amündsen は八、九寸の立派な青年、一つ違ひの十八と十九だとは記載がなければ誰が信ずるものか。此の二人が Stage の上で握手して分れた時、New stars に對して與へた賞讃の聲は前の Groettunsbraaten, Bergendahl, Thams にもまして劣りはしなかつた。彼等の將來に祝福あれ。

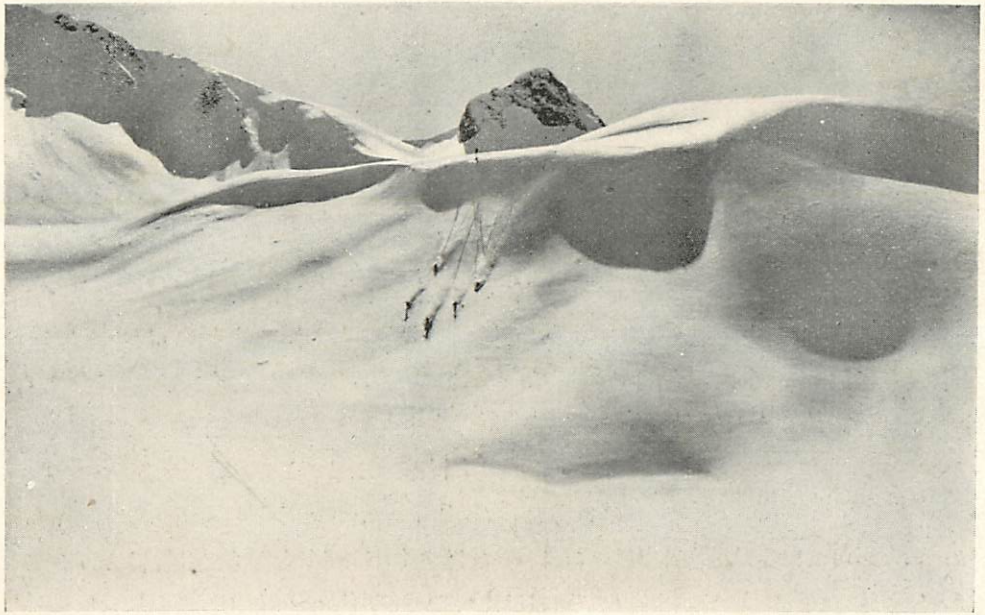
之で Holmenkollen デーは終つた。然し此の餘波が町中夜中の二時三時頃まで續いた事は申す迄もない。

學校を休んで此の如き大會の出來る事を羨しく思ひ、此の大會が國民一般の體育デーである事を諸威人のために喜ぶ。

終りにのぞんで Norway スキー協會の人々が叮重な待遇をして下さつた事を厚く感謝します。幹部の人達は多くは昔の skirunner で日本にも一度は行きたいと云つて居られるから或はその中の一人二人は行かれるでせう。「若し Kronprinz が行かれるとなれば自分も行く」とは Oestgaard 氏の話。

瑞典の Kronprinz が日本に行かれる事に定まつたので或はこの次ぎは Jumper である Norway の kronprinz が行かれる事になるかも知れない。

—— 三月二日オスロよりコペンハーゲンへの汽船中 ——



滑　　走

雪崩と地形圖（補遺）

大島亮吉

登高行第六年所載の「雪崩の知識に對する一寄與」のうちに「雪崩と地形圖」の一項を書いたが、そのなかでマルセル・クルッツの雪崩の地形圖上での研究のことを一言して置いた。然し乍らその時は種本となるべき文献が手元になかつたため充分な説明をすることが出來なかつた。その後それについてその文献を手にすることが出來たからその補遺をこゝにする。

すでにその登高行第六年の「雪崩と地形圖」のセクションのうちにも紹介して置いたやうに、マルセル・クルッツが一九〇七年以來十七年間のアルプスに於ての經驗と研究の數々を集積した最初の著書「冬季登山」(Alpinisme hivernal, le skieur dans les Alpes. (Payot, Paris 1925.) には、彼れが嘗て一九一九年の瑞西スキー協會年報 (Ski Annuaire de l'Association Suisse des Club des Ski.) に載せたる「スキーロイファーはいかに地圖を讀むべきか」Wie liest der alpine Skiläufer seine Karte?) も、その第五章新登山術 (Chapitre V. La nouvelle tactique) のうちに收められてある。

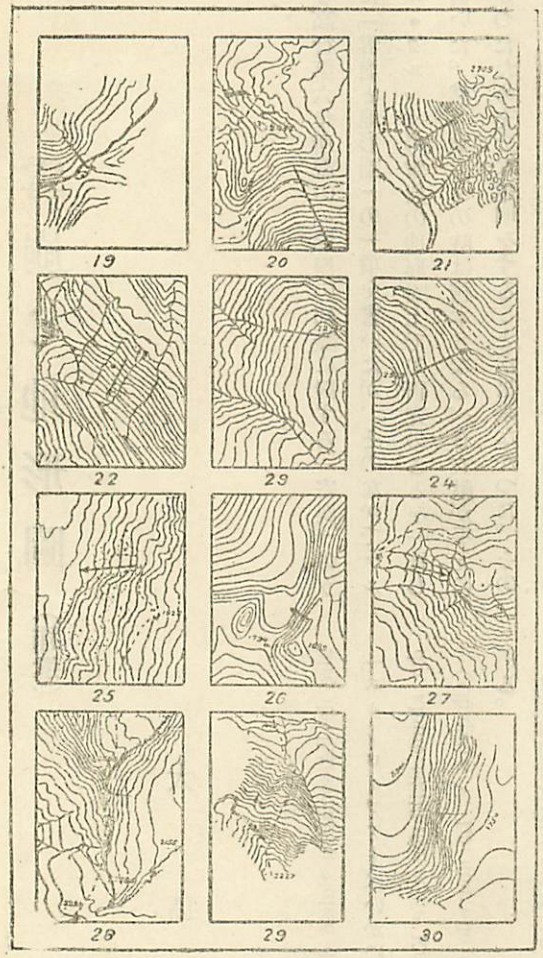
註。尙同研究は更らに獨文のものと同題の Comment le skieur doit lire sa carte? の題下で佛文となつて「レコオ・デ・ザルプ」(l'Echo des Alpes. No 3. 1920.) 誌上にも載せられてゐる。

勿論私の以下の補遺はマルセル・クルッツの新著「冬季登山」よりして書くものである。これは、登高行第六年の「雪崩と地形圖」のための補遺であると同時に「山とスキー」第十四號(?)所載の「シーロイファーは如何に地圖を見るべきか」なる譯文の續稿でもあることに留意して下さることを願ふ。

マルセル・クルッツの地圖の登山術的見地からしての新研究は、その雪崩の地形圖上よりの研究に依つて更に歩を進めてゐる。このことは前述の關係文獻を讀まれた誰れしもの氣づくところであらう。

直ちに私は彼れの研究をこゝに移植するこゝする。

彼れは嘗て旅行者が雪崩に出會したその地點を地形圖で表示して、それに説明を如へてゐる。その用ひた地形圖は例のズイークフリート・アトラス（Siegfried Atlas. ズイークフリート・アトラスとは普通に呼ばれてゐる名で、正しくは Topographischer Atlas der Schweiz と云ふ名である）五〇〇〇〇ノ一を用ひてゐる。同地形圖は三十米突の等高水準曲線（Courbes de niveau équidistantes.）となつてゐるからして、すぐそれを我國の陸地測量部發行の地形圖にあてはめることの出來ない憾みがある。それからその雪崩の惹起した地點と、その方向は矢符を以つて圖示してある。（詳細は個々の圖の説明に讓る。）



關係圖の説明

第十九圖

コル・ドウ・ラ・フルカ（Col de la Furka 2421m）の頂上。圖上の峠の頂には國道（route cmfonale）が通じてゐるし、オーテルバツスホエエ（hôtel

Paßhöhe）がある。一九〇九年一月二十二日の雪崩。傾斜度は傾斜度標準圖第二—第三の中間、（同傾斜度標準圖は「山とスキー」誌上に掲載せられてゐる故、それを參照せられたし）三〇〇mの幅の狹い斜面。雪質はクラスト。雪板（planches de neige, Schneebrett, slabs.）の連續して累積せる二つの層が、四人の隊の重量に屈して、雪崩は生じたのであつた。三人は埋沒して死んだ。（Sch. V, 128; VIII, 39; Echo des Alpes, 1919, 79-80）

第二十圖

ヴァシュレエの牧場。（Alpage du Vacheret.）バアギュ（Bagnes）の谷の右岸。一九一四年三月一日午前七時の雪崩。傾斜度は傾斜度標準圖の第二—四の中間。線と點との交互線は登山隊の通つたルヴロンの帶狀地と行路を示す。雪質、並びに雪層の狀態は、八十センチメートルの粉雪に覆はれたクラスト。寒冷な、甚だ好晴な日。雪板が三人のものを運び去つた。登山隊に依つて實際横斷せられた帶狀地は、僅かに其の傾斜度は傾斜度標準圖第四—第五の中間の程度しか呈しないものである。然し雪崩を惹起せし斜面全體は傾斜が傾斜度標準圖第二—第三の中間にある程急な凹形斜面に依つて支配せられてゐた。然かも其の凹形斜面に於て雪は不安定な狀態となつてゐたのである。登山隊の通過は其の不安定な狀態にある雪層に動搖を與へるに充分であつた。第八圖と似たる場合。斷續線に依つて示され、標高二七五二の上の鞍部を越えてゐる行路をとることが望ましい。登山隊の通過せし斜面の平均傾斜度はルヴロンの帶狀地の環つてゐる高原の傾斜度より大であるが、然し後者はその傾斜が一樣であり、ルヴロンの帶狀地の支配してゐる斜面の傾斜度よりは小である。（レコオ・デ・ザルプ誌、一九一四年二六一—二六九頁）

第二十圖に對する脚註

余（マルセル・クルツツ）はこの第二十圖の雪崩災禍に遭遇して奇蹟的にもそれを逃れたヴエヴエのエドウアール・コツレヴオン氏（Ed. Correvon de Vevey）と共に現にそのカタストロフの舞臺を訪ふの機會を有した。然して其處を訪ふた當日は、雪は充分壓縮してゐた。山も非常に良好な狀態であつた。然し余は尙ほ其の恐るべき斜面を瞥見したのみで甚だ強い印象を得た。

それより數日後の一九二〇年一月二十五日に余は案内者モーリス・クルツト（Maurice Crettez）とヴエルビエか

らローザブランシュ Rosablanche に登山して前掲第二十圖中に斷續線を以て暗示せし路筋を實際に通過した。その路筋は余が地形圖上より前記せし原則に依つて第二十圖の問題の地域に就ては絶對に識ることなく求めて決定したものであつた。そしてクルットと余とはこの路筋がこの地形に於ては眞實採らるべきものにて、正規狀態に於ては全然雪崩の危險から免がれてゐるものであることを確證した。（以下省略。Guide du skieur dans les Alpes valaisannes, vol. I. p. 46 並びに Marcel Kurz, Alpinisme hivernale. crapitre XV, P. 345 を參照。）

第二十一圖

プラン・ドウ・ラ・ショオ Plan de la Chaux (2040m) とコル・ドウ・フネートル Col de Fenêtre（ヴアル・フエツレ val Ferret）の路筋に當るフネートル湖との中間に位置する斜面。一九一一年一月十五日（午前十時）の雪崩。傾斜は傾斜度標準圖一—三の間、クラストとなれる雪質、すべての條件に於て常に危險なる斜面。然してこれは圖上標高二七〇九mの地點の東方に於て、コル・ダルバーユを越えることに依つて非常に容易に避け得らるゝものである。（ヘルヴユー・アルパン誌一九一一年六六頁。ジユールナル・ドウ・ジユネーヴ誌一九一一年一月九日所載。）

第二十二圖

ベリザール Beriseal とバン Bim とに通ずる峠であるザフリツシユパツス Saflischpass の北山腹一九一五年十一月十七日の雪崩。傾斜は傾斜度標準圖二—三の間。地形參考圖第十圖に近似せる地形。兩側の峻嶮な谷。谷底は良好狀態には通行し得。但し河流は危險。六人の犧牲者。（アルピナ誌一九一五年二三八頁。）

第二十三圖

ブレーメンビユール Bremenbühl (2261m) ダボスの上リチャードソンの「スキーランナー」に引用せられた雪崩。傾斜は傾斜度標準圖第四に該當。不良狀態。多量なる降雪後のフエーン。二人のスキー滑走者に依りて惹起せられた板狀雪崩。（スキー年報第八年二七—三〇頁）

第二十四圖

エンガディーンのマドウラインの上なるヴアル・デシア val d' Eschia. 一九一六年二月二十日午後六時の雪崩傾斜は傾斜度標準圖第四、約五〇サンチメートルの降雪ありたる後の不良狀態。快晴。粉雪雪崩。犧牲者二名。

彼れ等は河流に沿ふて右岸を登り來り、危險な斜面の下部に於て襲はる。他の左岸を通ればこの災禍に遭ふことはなかつたであらう。（スキー年報第十二年五三—六〇頁。）

第二十五圖

パルパン Parpan の上のヴアル・ベルラ Val-Bella. 一九一八年一月七日（夕刻）の雪崩。傾斜は傾斜度標準圖第三。二つの森林地間の小谿。險惡狀態。濕度多き天候輕いフエーン。表面だけ氷結せる雪質狀態。斜面の上部はウインドクラスト。豫めこの地點に雪崩の惹起することは誰れも觀察しなかつた。（スキー年報第十三年七三—七六頁。M. E. Meisser (aCoire) の個人的報告）

第二十六圖

ザーネンメーザー Saanenmöser の上のフンズリユツク Hundsrück 近くのシュタント Stand.(1939m.) 一九一三年十二月二十八日午後二時の雪崩。一五〇米突の短かき斜面。傾斜、傾斜度標準圖第一—第二の中間。險惡狀態三〇—四〇サンチメートルの新雪。フエーン。十名よりなる斥候兵の一隊が短距離の間隔を置いて梯形にて斜面を横斷せし時惹起した。（スキー年報第十年一三六頁）

第二十七圖

ダボス近くのバルゼーン Parsen. 一九一一年十二月二十二日午前十一時三十分の雪崩。傾斜は傾斜度標準圖第三—第四の中間。險惡狀態。フエーンを伴ひたる吹雪。氣温昇る。（スキー年報第八年一二三頁。アルビナ一九一二年一一—一二頁）

以上此等の實例圖の研究は教訓的なものである。然して此等のものは高等なる冬季登山術の原理を確立するものである。雪崩災禍（第二十、二十一、二十二、二十六圖の場合總ては）の大部分の原因は、一に登山者の隊が地形圖（ズイークフリート・アトラス）の上に表はされた夏のための小徑（點線路）か或ひは通常夏期間のみ通行する路筋を通つたことの結果である如く思はれる。其故先づ地形圖上よりして地形を豫め以上の如く傾斜度標準圖、地形參考圖、スキー行路を求むる原則を參照研究して求めたる行路は常に最も確實なる行路であり、又屢々最もその場合適した行路であるであらう。以上のことに關して參考となるべきは第二十八圖以下の三圖である。次ぎにそれに就いて説明する。

第二十八圖

ザネッチパッス東方の地形。點線はウイルトホルン地域に向ふ峠に通ずる良好な行路を表示するものである。特殊な山稜。それはザネッチの雪原に越えるために徒歩にて通行せねばならぬ山稜である。何故ならばザネッチの雪原の上部の斜面は傾斜が傾斜度標準圖第二—第四の中間である程急傾斜な斜面であつてスキーの進路を阻止するからである。山稜の稜線は一般に雪が風に吹き飛ばされて悪く、岩石が裸出してゐる故スキーを持つて歩くことは容易である。

第二十九圖

傾斜度標準圖第一—第二の間なる傾斜度を有する甚だ急な斜面。この斜面はフリィオネー Frionnay の上方、バノッシィエール登山小屋(la cabane de Panossière. 2715m)への通ずるコルバッシィエール (Corbassière 2227m.) の山稜とバーギュのドランス (Prance de Bagnes) との中間に位置する。點線は三月下旬最良狀態に於て著者 (マーセル・クルッツ) が一部分スキーを使用し、一部分徒歩にて通過せし行程を示したものである。此れは時には非常な急斜面にても何等の悪結果を生ぜずに冒して進むことの出來ると云ふ一例を證するものである。

然し此の場合中止することも決して無思慮ではない。

(Marcel Kurz, Alpinisme hivernal. P. 215 を參照)

第三十圖

此の圖はズィークリフート・アトラスの不體裁なる誤記を再示するものである。テオドウルの氷河とブライトホルンの高原との中間に位置する斜面。點線は登山者にツエルマットよりブライトホルンに登山する際通常とる行路にて、又ズィークフリート・アトラスにも表示してある行路を示すものである。此の斜面の傾斜は傾斜度標準圖第一に屬する非常な急斜面であるべきだが、然るにそれは何等の危險なく、苦痛なくスキーにて登降し得る斜面である。(此の項終り)

春の藏王日記

柏木民次郎

四月一日

三月中旬に五色温泉前の斜面で辷つた時に今年のスキーはこれが最終になるかも知れないと思つたので、終日休み無しに辷つたが未だ足らなかつた。

春の藏王の雪は私をとうとう峨々温泉につれて來てしまつた。

仙臺を朝五時半の汽車で發つて六時二十何分かに大河原驛に着いた。天氣は非常によかつた。大河原、遠刈田間二時間の輕便鐵道も白い懷しい山々の連りを眺めながら樂しかつた。遠刈田はいつもながら餘り感じのよい所ではなかつた。峨々温泉の支店でうどんを一杯たべて、スキーをかついで九時に出掛けた。此の邊には雪は少しも無かつた。濁川を渡つて小川の清水に喉を潤して清水原へ出た。是にも雪は皆無であつた。後から追ひ付いた郵便屋さんと雪の話をしながら登り續けた。スキーが次第に重くなつて來た原を通り抜けて林間に道が入るあたりから雪が少しありはじめた。直ぐとスキーを穿いた。弘法さんの下にちよつとした、とぎれがあつたがそれから上はもうかなりの雪があつた。一月來た時より林間に雪がたくさんあつて通りよい所もあつた。峨々温泉に正午に着いた。Fが已に來てゐるには驚いた。中食を濟して畑で辷つてゐるとFが山から歸へつて來た。夜はFとそれから二高のIさの話を聞いた。熊野岳の頂それから刈田岳への馬の脊で風が強かつたのでお釜の方へ吹き飛ばされそうで實に危險であつたらしい。

四月二日

午前中は出掛けなかつた。宿の二階で書のむすびを食べ

たのは滑稽だつた。午後からFと私と二人で温泉の對岸の林の斜面を直接に賽の磧へと登つてみた。春の暖氣に雪が柔かになつてゐたので、登りよかつたが樹間が登るにつれて狹くなつたので、登山道を迂廻するよりも時間がとれたこの斜面から林を通して足下に見た温泉の溪流の勝れた景色は二人を悦ばした。スキー小屋でIと一緒になつて賽の磧を横ぎつて乙女坂を登つた。Fの話に據ると昨日よりも雪がずつと減つたそうだ。春の日に次第に雪が消えて行くのを見ると心細くなつた。雪が悪かつたので歸りの辷りも悪るかつた。夕方から馬鹿に暖くなつた。一雨でも降ればスキーは終ひだと心配してゐると夜になつて雪が降り出した。蘇生の思ひだつた。

四月三日

雪は止んだが天氣はあまり良くはなかつた。賽の磧へと出掛けた。雪が深かつたので登りは非常に骨が折れた。賽の磧での滑降も思はしくなかつた。スキー小屋の二階に上つて中食を食べた。Iは遠刈田へ去つた。宿に歸へつてみると東京からNが來てゐてうれしかつた。夜は又雪が少し降り出した。

四月四日

朝目を醒すと吹雪は去つて峨々谷は春の日に滿たされてゐた。FとNと私と三人で雁戸山行に八時に宿を出た。熊狩人の足跡を辿つて登り始めた。雪が深かつた。温泉宿の直ぐ上を、急な山道を辿るより外に仕方がなかつたので骨が折れた。林間を登りつめてからは非常に樂になつた。妙號峯の麓で中食を濟した。天氣はよかつたが風は相當に寒かつた、妙號峯の頂に登つて雁戸山への通路を見た。尾根づたいの道は困難らしかつた。峯の風が非常に強く歸りが案じられたので雁戸山行は中止して左手の熊野岳に登つて刈田岳を通つて歸へる事にした。Fは一日に通つたばかりの道程なので同行を拒んだが案内役にと無理に行つて貰ふ事にした。雪は硬たかつたが登りはさまで困難ではなかつた。熊野神社の祠を覺しき所でアザラシをとつて刈田岳を目掛けて辷り下りた。三時に頂に着いた。祠はすつかり雪に包まれてゐた。Fが後れて登つて來たのを待つて刈田岳を下り始めた。頂上附近の雪はよかつた。降るに從つて悪くなつて來た。スキーが少し雪に沈んで抵抗が多くて滑行が思はしくなかつた。その上腹が空らであつたのと疲が來たので廻轉も自由が利かなかつた。乙女坂の上で一休みして餘りの甘納豆で腹を胡麻化して更に降りはじめた。二日

に此邊に來た時より雪が增してゐて滑りはよかつた。四時過ぎた頃又峨々に歸へつた。

四月五日

四日間は樂しく過ぎた。曇天の上に風が吹き捲つてゐたので出掛けるのも懶うかつた。昨日の疲れを癒す意味で一日休養ときめてしまつた。午前は惰眠を炬燵に貪り午後は某山岳會の會報を讀んだ。その中にあつた登山用語の說明には驚かされた。開いた口が塞さがらなかつた者が多かつた。日は暮れた。風も凪ぎて砂を撒いたやうに星が光り出した。もう休暇も終へた。明日には歸らなければならなかつた。遠刈田へ空しく降るのは氣が進まなかつた。山を越へて上ノ山へ出るのもよかつたが里近くになつて雪が盡きてスキーを擔ぐのが嫌だつた。雁戸山行もあまり面白くは無さそうだつた。高湯へと山を越えて行くのも先年一度行つたので興が起らなかつた。

かう考へた末三人して相談の結果翌六日に刈田岳から御前岳を通つて鎌先温泉へと出る事にした。宿の馳走の餅をつけ燒きにして舌鼓をうつて寢についた。

四月六日

朝六時にFが一番先きに起き上つた。それから入浴、食事、萬端を濟して七時半に峨々溫泉をF、N、私の三人はスキーを穿いて出發した。薄い白雲が天を覆ふてゐたが、峨々谷には風は少しも無かつた。靜かな〳〵朝であつた。生暖いのを氣味惡く思ひながら賽ノ磧へとアザラシを付けたスキーをすべらしてゐた。登りよい雪だつた。賽ノ磧の地藏小屋に九時に着いた。一休みして汗を拭つた。廣々とした雪原の先に妙號、熊野、刈田、更に南に杉ケ峯、屏風の連山が私達の進路に立ち塞さがつてゐた。賽ノ磧を横ぎつてしまふ頃から寒い風が來始めた。刈田岳の南側に小谷が二三あるのでそれを避ける爲めに乙女坂を登つてしまつてから一休みして、刈田岳の中腹を絡んで頂上近くまで登りつめた。吾妻連山更にその横に安達太郎山がはつきりと指差された。是でアザラシを脫いで杉ケ峯の方向に愉快な滑走をして栂の林に入つた。寒い風を樹間に避けて十時半食事をした。

刈田岳と杉ケ峯との中間に一峯があつた。十時に私達は此の峯に登りはじめた。雪が硬かつた。スキーを穿いたまゝでは非常に損んであつたのでスキーを脫いで登りやがて頂に着いた。頂上の眺めは美しかつた。手近に刈田、熊野が重なつて聳え、右手に遠く泉、船形山塊、右手に月山が

横はり更に朝日岳がそれに連らなつてゐた。杉ヶ峯の全容は展開して直ぐ面前に私達を指し招いでゐた。又スキーを穿いて杉ヶ峯の麓まで痛快に滑走した。登りになると雪の硬いのを利用してスキーを脱いで登行を續け時間を儉約した。正午杉ヶ峯の頂上に着いた。浩々とした雪原を隔だてゝ南北に長く屏風岳がひろげられてゐた。私達は暫くその美觀に見とれてしまつた。又スキーを穿いて雪原へと辷り込んだ。太古のやうな靜けさ原始のやうな穩かさの中に立つて梨さゆで卵とを頰ばつた。Fは是に小屋が一つ欲しいなァと私語いた。私も欲しかつた。褥だらう全身を雪にうづめて梢のみ僅かに雪の上に露はしてゐた。雪量は相當に多いらしかつた。スキーの通過に邪魔になる木叢は少しも無かつた。

雪原を過つて屏風岳の南峯に登りはじめた。雪は硬かつたけれども斜面が緩いのと廣いのでスキーを穿いたまゝ頂上に登つてしまつた。振返ると屏風岳の東側の斷崖絶壁が少し雪庇をなしてずつと北方へのびてゐた。足下には殺氣に充ちた細い尾根が延びその先に峨々とした御前岳が巍然と聳えてゐた。私達は何物かの願にでも入つて行くやうな氣持でスキーを脱いで手にかゝへながら尾根を渡りはじめた。日陰の雪の硬い所はNのピッケルで足場を切つてゆつくりと上り且つ下つて行つた。膽寒だつた尾根も終へて御前岳へと登りつめた。風が強かつた。岩角につかまりながら一歩〳〵足元を注意しながら登り續けて午後二時半頂上に三人して立つ事が出來た。頂上は狹かつた。風も強かつたので一寸と下つた風蔭の祠のある所でリックサックを置いて息をついた。小祠は雪にうづもれて見えなかつた。横たはつてゐた丸太に腰を掛けて殘りのむすびを頰張り梨をむいた。

三時少し前に屏風の景色に別れを告げて御前岳の頂上を出發した。雪が消えて岩が露出してゐたのでスキーを直ぐと穿く事は出來なかつた。不平を並べながら暫く下ると見事な傾斜が眞白に麓の林までずつと續いてゐた。スキーを穿いて下りはじめた。雪が悪かつた。クラストが弱いために一寸した打擊で破れてスキーが埋れて非常に困つた。何んと言つても下りであつた面白く樂しく廻轉をしながら降りを續けた。次第に傾斜が緩くなつて來た。遙か遠くに雪原の中央に午後の日に光つてゐた鳥居を見つけた。鳥居を目標に下つてゐると一日或は二日前の者とおぼしきスキーの跡があつた。この跡をたどつて四時半鳥居に着いた。

一休みの後平地に近い下りを續けた。雪はほんの少ししか無かつたが幸に草地なのでスキーを辷べらす事が出來た。原は盡きて林間に入つた。炭燒き小屋が散在してゐた。鎌先温泉への道を敎はつて暫く下ると雪が消えてしまつた。

終日何の不安も無く照り續けてくれた太陽が西の山端に近づく頃薄明がある内にと一里半の山道をスキーを擔いで六時四十八分に鎌先温泉に着いた。温泉に汗を流して夕食をすまし又翌日迂廻して峨々温泉へ歸へるFとNを是に殘して私は乘合自動車で白石驛に出て急行列車に乘つて九時半仙臺に歸へた。

四日に峨々温泉から名號峯(一四九〇)、熊野岳(一八四〇)刈田岳(一七五九)を通つて峨々温泉に歸り今又刈田岳から南方杉ケ峯(一七四四)屏風岳(一八一七)御前岳(不忘山)(一七〇五)へとスキーの跡をつける事が出來て思はず藏王山を南北に縱走してしまつた。

同行FとNよ幸に健全なれ又來ん冬に春に新らしきスキーの道を印しづけやう。

彙報抄錄

瑞典皇太子殿下の御來遊

瑞典皇太子殿下並妃殿下には今夏(八月下旬)日本を御訪問なさる由。昨日のワサ・スキー競走の決勝點で親しく殿下から承りました。

日本スキー界が瑞典に大なる恩惠をうけて居る事から日本スキー聯盟の熱誠な歡迎を希望いたします。

(二月二十二日木原均氏報)

新著圖書

Amtliches Jahrbuch (Peege) 1926

ベヂスツリアン

Der winter 19 Jahg. Nr.1—Nr. 12

Ski 22 Jahg. Nr. —Nr. 16

山とスキー

第五年　總目錄

自一九二五年七月　第五十號
至一九二六年五月　第六十號

札幌　山とスキーの會　發行

山とスキー第五年目次

（自一九二五年七月第五十號　至一九二六年五月第六十號）

論　說

山岳及びスキーの身體に及ぼす影響とそれ等に依つて起る負傷に就ての研究……本田治吉…（二八）（七七）
スキー登山とスキースポーツと……赤松動…（一三二）
再びスキースポーツとスキー登山に就て……岡村源太郎…（一七二）
メンバーシップ……赤松動…（二二九）
山岳登行に際して自然の人體に及ぼす偉力……本田治吉…（二六九）（二九二）
ストーに就いて……六鹿一彦…（三二七）
雪庇の生活史……石内直太郎…（三九九）
雪崩と地形圖……大島亮吉…（四三一）

登山及スキーの研究

如何にして安全に登るべき乎……和辻廣樹譯…（一四）
高い高度に於ける馴化……阿部謹吾譯…（一六六）
スキー材と雪と蠟とに就いて……岡村源太郎…（二三五）

スキー蠟に關して……小森太郎譯…(二三一)
渡　渉……田口鎭雄…(二五〇)
スキー兩杖と海豹の皮の研究……小森太郎…(三六)

スキー術及スキーの競技

アプローチに就いて……伴　素彦…(九〇)
クリスチアニア・ターンの分類的考察……中野　誠一…(一一七)
スキー競技練習の一般的注意……岡村源太郎…(一三八)
スキー競技種目に就いて……岡村源太郎…(一九一)
國際スキー競技の採點方法とその變遷について……廣田戸七郎…(二〇七)
The Revolt against the Long-distance Race……by Arnold Lünn…(二八四)
新しいレース規則とその實際について…(ディスタンスレース)……岡村源太郎…(二八五)
杖及びその活用に就いて……高橋　昂…(二九九)
ポーランドに於ける競技としてのスキー……岩森秀夫譯…(三一〇)
フインランドに新設せられたジャムピングヒルに就いて……廣田戸七郎…(三三一)
ジャムプ競技の技術的觀察……廣田戸七郎…(三四五)
ディスタンスレースに就いて……岡村源太郎…(三五四)(三九八)
芬蘭のスキー……今泉剛一…(三六八)

國際スキー聯盟會議と國際スキー選手權大會の消息……木原　均…(三七九)
北歐スキー通信……木原　均…(四二一)

山岳紀行

五月の黑岳小屋を中心として……山口　健兒…(一)
五月の鳳凰山地藏岳……額田　敏…(三六)
春の燕岳へ……成瀨岩雄…(一〇八)
美生川より日高山脈へ……和辻廣樹…(一七七)
湖の旅……館脇　操…(三七)(二五八)
一月の暑寒別岳登山……須藤宣之助…(三三)
二月の夕張岳……小森五作…(三六四)
春の藏王日記……柏木民次郎…(四三七)

想片

エミール・ジャヴェルに(詩)……大島亮吉…(二六)
スキーの思出……大野精七…(四二)(一五〇)(二〇一)
始めてスキーを練習した時……志賀亮…(四七)
「山とスキー」五週年記念號發刊に際して……加納一郎・中野誠一・長谷川敦・君一生・廣田戶七郎…(五〇)

山の獵人……板橋敬一…(九五)
斷崖(詩)……相川正義…(一四八)
モン・ブラン初登山の話……加納生…(一五七)
驢馬翁……西村眞琴…(一六〇)
リシリしのぶ……館脇操…(一九九)
詩……(一四九)(二四三)
拔萃・譯章……(一六五)(四一一)

雜錄

彙報抄錄……(七二)(一一三)(一六三)(一四四)(一七九)(二二五)(二三七)(二七〇)(四〇七)
十三シーズンを送りて……廣田戸七郎…(六一)
先シーズンの雪……GOK生…(七〇)
會則、會員名簿……(七三)
スキー即下駄下駄即スキー……君一生…(一〇六)
三考……君一生…(一九〇)
冬を待つ(各地よりのスキーだより)……(二三五)
シーシュプルングの超人……廣田生…(二六四)
アバンチュール……(二八〇)
伯林から(木原均氏より)……(三三五)
ストックホルムへの船中にて……今泉剛一…(四〇五)

大會餘談……（三七三）
ゴシップ……（二四七）

寫眞版

比布岳より永山岳への雪稜……山縣　浩…（一）
地藏岳より南アルプスを望む……額田　敏…（三八）
黑岳登山小屋附近……山縣　浩…（三）
奥穗高と其西尾根……岡部長量…（七）
唐澤谷から前穗高を望む……岡部長量…（四四）
アシュペツ岳（一）……坂本直行…（一五）
アシュペツ岳（二）……坂本直行…（一六）
レブンソウ……岡田喜一…（一六五）
美生岳より南方を望む……和辻廣樹…（一六六）
十勝岳附近……板橋敬一…（二〇七）
ブリタニアン・ヒュッテ……（二三〇）
奥手稻附近……小野　修…（二四九）
チューリン・タムス……（二六八）
ジルバー・シャンツエ……（二八五）
アシュペツ岳……板橋敬一…（三〇〇）

飛躍(北海道豫選大會)……(三七)
フインランド●ラハテイシヤンツエ……(三三)
シルエット……坂本彌直……(三四)
三角山附近(北海道豫選當日)……加納一郎……(三五)
タムス選手の飛躍振り……木原均……(三八)
五十キロ競技中のフインランド選手……(三九)
靜寂……坂本直行……(四一)
滑走……(四二)

圖版

ヒユツテの略圖……(一五)
地圖略圖(ポーランド)……(二三)
ストツク說明圖……(二八)
フインランド●ラハテイシヤンツエ……(三三)
雪庇說明圖……(三六)
優勝者スケツチ(國際スキー選手權大會)……(三八)
沼尻ジヤムピングヒル……(三九)
雪崩地形圖……(四二)

轉居廣告

今度私共の會の事務所を左の處に移轉致し五月十日より會務を取扱ふことになりました。何卒今後共多分の御後援と御指導とをお願ひ申します。

札幌市北五條西十一丁目二番地

山とスキーの會

◇賜御用命◇

竹田宮・北白川宮・山階宮各宮殿下

カナデアンロッキー登山隊御一行の御歸朝後弊店に賜へる證狀

靴は登山用品中最モ大切ナモノゝ一デアリマス。岩石氷雪又ハ水中激シク使用シテ而モ何等登山者ニ不安ヲ與ヘヌ丈ケノ物ヲ絶對ニ必要トシマス。此ノ度「ロッキー」登山ニ際シ一行ノ使用シタ靴ハ山崎君ノ作製ニカヽルモノデ殆ンド完全ニ近イ好成績ヲ擧ゲテ井マス。形ニ於テ縫ヒ方ニ於テ斬ノ打方ニ於テ其他防水ノ點ヤ强サノ點ニ於テ凡テ平均シタ立派ナ出來榮デシタ。出發前ニ最モ恐レタコトハ靴ノ不完全ナル塲合ヲ考ヘタコトデシタ。併シ此ノ不安ナク登山ヲ出來タコトハ同君ノ賜物ト感謝シ且ツ今後モ益々御奮勵英國ノ「カーター」ヤ瑞西ノ「アマハー」ニ優ルヤウナ物ヲ作製セラレルヤウニ期待シテ止ミマセン。

大正十四年十月二十一日

槇有恒
橋本靜一
岡部長量
波多野正信
三田幸夫
早川種三

山崎靴店殿

登山靴とスキー靴

—呈贈グロタカ—

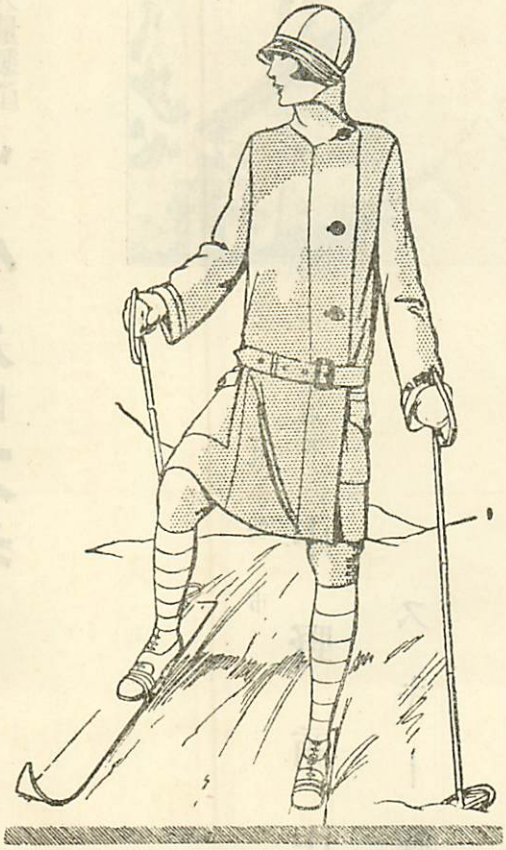
慶應山岳部御用

山崎靴店

東京四谷大横町角

スキー並附屬品
製作販賣

••(呈カタログ)••



札幌

小谷運動具店

電話 一五六八番
振替 七九六四番

優秀なるレコードは
優秀なるスキーに依る!!

斯界第一
大量製産
ツバメ印スキー

全國有名店に有り

製造元
札幌市
中野商店
スキー部

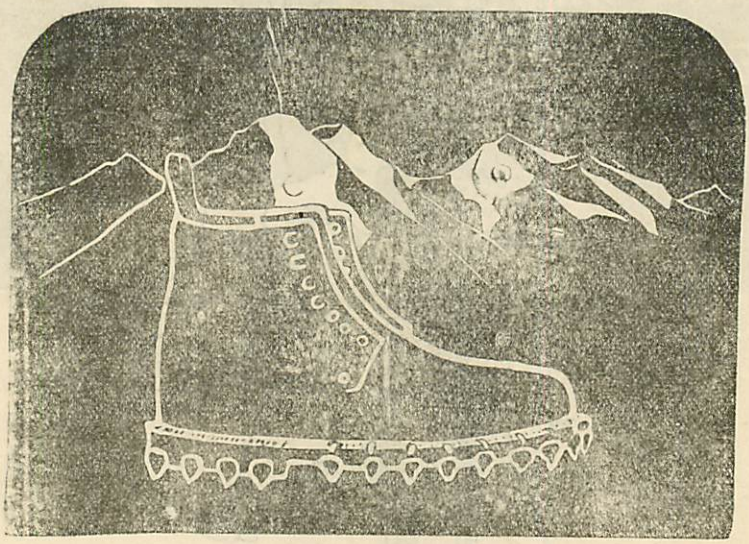
優秀ナルスキート其用具

小樽

梅屋運動具店

第二回畜産工藝博覽會ニ於テ

一等賞金牌受領



登山靴とスキー靴

東京市本郷區四丁目角

太田屋靴店

電話小石川四七一二番

振替東京六一二七番

◆山とスキーの會は北海道帝國大學文武會スキー部の有志が、此の雜誌を發行する爲に作つてゐる會です。

◆スキーを研究せられる人、登山に趣味を持たれる方が一人でも多くお讀み下さることをお願ひいたします。

◆山岳及びスキーに關して何なりとも御寄稿下されんことをお願します又印畫の御惠送を切望致します。原稿紙は御申越次第お送り致します。

◆原稿は、、。を一字とし、行を更めるときは一字下げること。

◆記事中の數量は全て、C. G. S. 系によられん事を望みます。

◆雜誌代金に就て一應下記の諸項を御承知下さい。

◆本會より發する電信略號を「ヤマ」として居ります。

定價 金參拾錢

*前金御申込か、現金でなければお渡しいたしません。

*御送金はなるべく振替にてお願致します。

*六冊分前金拂込の方には送料を頂きません

*前金の切れた時には最後の分の包裝にその旨記します。次の御送金あるまで配本を見合せます。

*本誌は營利的の刊行物ではありません。紹介、緣故の有無にかゝはらず雜誌の代價は頂きます。

大正十五年四月廿八日印刷
大正十五年五月一日發行
（毎月一回一日發行）

編輯者　相川正義
印刷兼發行者　廣田戸七郎
印刷所　札幌印刷株式會社
札幌市北一條西二丁目
發行所　山とスキーの會
札幌市北六條西六丁目
振替口座小樽八四九五番

La Gazeto
de la
Monta kaj Skia Klubo
No. 60. Apmgioilo 1926. Sapporo. Japanujo.

大正十二年七月二十七日第三種郵便物認可
大正十五年四月廿八日印刷納本
大正十五年五月一日發行

山とスキー 第六十號

定價參拾錢

The Leading Winter Sport House,

美滿津特製
慶大山岳部、學習院山岳部、早大スキー部
一高スキー部
帝大山岳、スキー部御用
スキー及びビンディング
ポップスレー
スレッデとトボーガン
スノーシュウ

冬期登山用具各種
ウキンター・キャンピング用具
フキギュア・ホッキー・スピード
スケート
アイス・ヤット等

合名會社
美滿津商店
東京・本郷・赤門前
電話(小石川)八四五・二〇七一